生き生きとした子どもの姿を目指す「園内研修」に関する一考察

― A園の取り組みより ―

久保田　真規子
浅　野　江美子[1]
A幼稚園職員

はじめに

日本の経済状況、及び政策の変化により、子育てを支える保育現場は、保育園・幼稚園の垣根を越え、認定子ども園の設置、公立園の民営化など園の在り方も多様化している。また非正規職員の増加による待遇や給与格差、正規職員の減少による業務負荷増加に対する策を講じる必要が求められている。

2015年度から実施される子ども・子育て支援新制度では、保育所・幼稚園に加え、両方の機能をもつ認定こども園の普及、小規模保育の体制強化など、これまで以上に多様な保育の営みが存在することとなる。G市では、統括園の人事異動として保育園から幼稚園への異動もある。保育士資格･保育園勤務経験がある職員が幼稚園にも勤務している。今回、二人担任制で保育実践をしているG市A幼稚園からの依頼により「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを表現できる子ども」をテーマに２年間の園内研修を行った。保育者間の「生き生きと遊ぶ子ども」についてイメージの統一を図る事に注力した。研究保育・反省・意見交換だけではなく、複数担任制の園で一つの現象をどうとらえ、どう言語化するか、具体的課題や対応策を擦り合わせ「言葉」にする手法を盛り込むことにより、保育者自らが生き生きと遊ぶ子どもの姿を求め、環境構成を変化させるに至った内容を報告する。

キーワード：・園内研修・環境構成・保育者のキャリア形成・二人担任制

Ⅰ．研究の目的

はじめに園内研修を実施したA幼稚園の教育方針・概要について述べる。

１．A園の概要

A幼稚園の概要：昭和39年９月A保育園として発足。昭和40年４月、A幼稚園として認

1　A幼稚園　園長

可。平成16年市町村合併により、Ｇ市立Ａ幼稚園となる。平成26年に創立50周年を迎え現在に至る。職員体制は、現在職員10名。長年勤務し、キャリアを積んだ保育者が多い。園長先生はじめ職員は、保育所勤務経験がある保育者である。この園の特色は、公立園として保育園から幼稚園への異動･幼稚園から幼稚園の異動がある。園内研修は､地域の幼･保･小・教育委員会に公開し、人事交流を図り研修を行っている。幼稚園から小学校への研修制度も2014年にスタートした。Ａ幼稚園が立地している地域の概要は、以下のようになっている。

① 当園はＡ地区の３・４・５歳児が在籍している。ほとんどの子が通園バスを利用し、近隣の子が保護者の送迎で登・降園している。

② 地域の自然は豊かであるが、子どもたちを安心して遊ばせる場が少ない。

③ 少子化が進む社会の中でＡ地区も出生率が年々減少する傾向にある。そのため、近くに遊ぶ友だちがいないといった状況がある。またライフスタイルの多様化で遠距離まで買い物に出かけ、買い物先の遊びのコーナーで過ごす姿がみられる。家庭では、室内でビデオやテレビゲームを相手に過ごさせることが増えている。そうした環境のなかで人とかかわることが少なく挨拶や、遊びに必要な言葉がうまく言えない子が見られる。

④ 乳児期に完了すべき排泄面などの自立が幼児期に移行している子が多く見られる。また､両親の生活リズムや変則的な就労時間で夜型になっている家庭もありそれらが、子どもたちの生活リズムにも影響していると感じられる。

⑤ 就園前に子育て支援センターや、幼稚園の親子プレー教室を利用していた保護者が多く、親同士・子ども同士のつながりが見られる。

少子化が進んでいる中、幼稚園では子どもたちの将来を見据え幼児期の教育の一層の充実を目指し、学びの芽生えを培う教育・幼児期の教育の発信・幼児期の教育の真価・幼小の学びの接続など幼児教育の在り方をおさえ地域や家庭と協力しながら教育活動を進めていくことに努力しなければならないと園では考えている。

(1) 園運営の基本方針

以上のような環境のなかで、園運営の基本方針は、幼児期の特性や一人一人の実態を踏まえ教育内容に基づき環境構成を行い、幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開できるよう以下の基本方針を定めている。

・教育計画の改善と充実に努める。

・人間尊重の精神に基づき、幼児を愛し、幼児と共に生きる保育者を目指す。

・職員一人一人の個性・特性を大切にしながら協力体制を整え研修に努める。

・地域・家庭との連携を図り、園の教育の充実に努める。

特に職員研修においては、園内研修を通して職員の資質向上を図り、全職員が「生き生きと遊ぶ子ども」をテーマに、幼児理解・環境構成の工夫に努めるという目標を示している。

(2) 園内研修の歩み

園の基本方針をもとに保育の質向上をめざし、平成６年の下越地区公立幼稚園研究会での三歳児の発表を皮切りに園内研修に取り組んでいる。平成17年度より「食べて遊んで元気な子」をテーマに設定し外部講師を招き、毎年開催とした。平成22年度にテーマを変更し「生き生きと遊ぶ子ども」(環境・お楽しみ的な活動)となった。平成25・26年には「生き生きと遊ぶ子ども」を言葉の領域を切り口とし研修を実施している。

研修の形態は公開保育・協議会形式で行い、近隣の園・小学校・教育委員会の関係者の参加により幅広い意見交換を行っている。また、前述のように人事交流として幼稚園から小学校への研修制度が2014年にスタートしている。

(3) 園内研修内容

Ａ園の今年度の研修目標は、重点目標である「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを言葉で表現する子ども」の具体策を明らかにすることであった。職員の共通理解を深める為に表１の内容で研修を実施した。

表1　研修内容

日程	対象児	内容
平成25年5月28日	3歳児　13名	研究保育・研究協議会
6月11日	4歳児　23名	研究保育・研究協議会
7月　9日	5歳児　24名	研究保育・研究協議会
平成26年6月24日	3歳児　15名	研究保育・研究協議会（撮影ビデオ確認）
7月　4日	4歳児　13名	研究保育・研究協議会（撮影ビデオ確認）
9月　9日	5歳児　23名	研究保育・研究協議会（撮影ビデオ確認）

(4) 研究の目的

本研究では、「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを表現できる子ども」の姿を目指すべく、研究保育で遊ぶ子どもの姿から、保育者の課題・対策を明らかにしたいと考えた。そのため保育者間のイメージを統一することに注力し、具体的課題・対策をすり合わせる手法を盛り込む事が、専門性をもった保育者自身の保育環境改善の拡大に有効

かの検証を行うこと、及び実践を通して園内研修の在り方を明らかにすることを目的とする。

2．先行研究のレビュー

研究の目的を明らかにするために、園内研修に関する先行研究を調べた。多様な保育が求められる時代に、幼稚園教育要領・保育所保育指針において研修の必要性が述べられている。2015年１月23日付内閣府資料[i]によると、子ども・子育て支援の「量的拡充」と保育の「質の改善」のため、研修機会の充実の記載がある。

園内研修のあり方については、諏訪（2003）[ii]は、私立保育園の園内研修を事例に「何を良い保育とするか」という視点で職務内容やクラス内の合意がされて保育アイデンティティが形成されると述べている。さらに園内研修で「保育診断表」[iii]を使い、保育者自身の自己評価から保育の有り様を検証している。

中坪（2013）[iv]は、感情の共有と自己開示の場としての園内研修の意義を示唆し、秋田（2008）[v]は、相互に言葉を重ねたり、繋いだりしながら話しあうことの重要性にふれている。その上で秋田（2015）[vi]は保育の「見える化」と園のコンピテンスを高めるには、子どもの事実を見る、学んだことを話し合う、明日からできることを語ることを提案している。

松井（2009）[vii]は、園内研修の在り方で保育者同士の語りあいが、単なる雑談に終わってしまうことを防ぐには、語りあいの焦点をぼやけさせない、具体的な題材が有効としている。一方、森上（2000）[viii]は実践現場の園内研修を事例に、多くの園内研修でみられる「いい保育ね。」と言われる実践を目指すのではなく「私の腑に落ちる保育」を追求する必要性を述べカンファレンスにより自分を開くことや、共通理解を急ぐあまり個人の納得を無視してしまわないこと、正答を安易に求めないことが重要だと述べている。

以上の先行研究を踏まえ、参加する職員が「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを表現できる子ども」を育むための園内研修を行い、保育者間のイメージ統一・言語化の重要性検証、園内研修の在り方について調査・研究を進めたいと考えた。

3．研究課題

「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを表現できる子ども」をテーマに園長先生を含む10名の職員のイメージの統一を図りその有効性の確認と園内研修の在り方を明らかにするものである。そのため以下の３つを研究課題とする。

（１）イメージの統一と園内研修の保育者の意識変化を検証する（2013～2014年の変化）
（２）保育者の課題から、環境構成や援助の方法について考察する
（３）「生き生きと表現する子ども」を目指すための環境構成の具体的な方法を導き出す。

Ⅱ　研究方法

研究目的を鑑み、ここでは園内研修の前後にアンケートを実施しその中から共通のキーワードを抽出した。さらにｋＪ法でカテゴライズするという質的研究法を選んだ。キーワードをもとに質問用紙を作成し、議論の方向付けと参加者間のイメージの統一を図った。

対象は園長・主任を含む10名の職員とした。質問用紙は別紙に示す。

１．研究課題(1)の方法

本課題では、園内研修時のアンケート調査から抽出されたキーワードを元に項目を設定し、2013年～2014年の園内研修後の保育士の意識を点数化してイメージの統一化の重要性を検証した。設定した項目は、「子どもの姿」、「保育環境」、「保育者間の関係」、「保育者の保育姿勢」、「保護者連携」、「保育者の条件」、「園内研修」の７つである。

２．研究課題(2)の方法

保育者の課題・対策について、研究保育時に保育実践の様子をビデオ撮影し、その映像をもとに各保育者が課題の抽出、及びその課題に対する保育者自身の具体的な対応策を立案しアンケート用紙に記述した。課題、及び対応案を再度カテゴライズし、議論の方向性とイメージを統一化し対応策の絞り込みを行った。

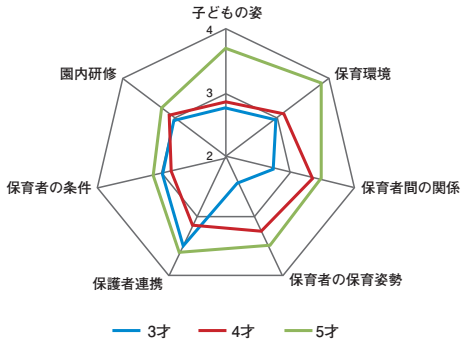
３．研究課題(3)の方法

研究課題２をもとに、具体的な方法について映像/討議結果を基に現場で検討を重ね、保育者自ら対策として立案した環境構成を具現化し、効果検証を行った。更にここまでの取り組みを振り返り、園内研修の在り方について検討を行った。

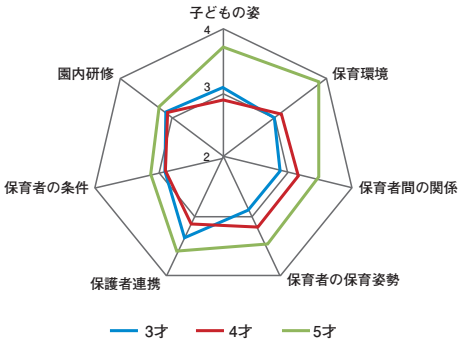
Ⅲ　研究課題(1)の結果と分析

1．研究結果１　研修後のアンケート調査

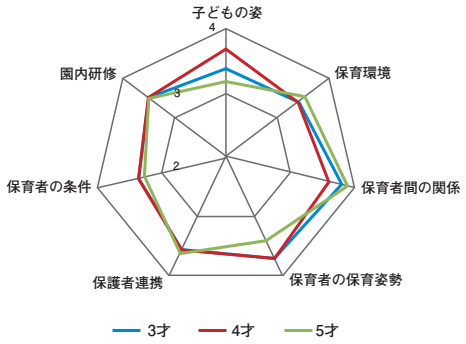
園内研修の前後にアンケートを実施し、その中から共通のキーワードを抽出した。さらにｋＪ法でカテゴライズする方法から研修後の変化について質問をし保育者から点数化する方法を試みた。



図Ⅲ-1　研修前　2013年年齢別とキーワード数値



図Ⅲ-2　2013年研修後年齢別とキーワード数値



図Ⅲ-3　2014年研修後年齢別とキーワード数値

図Ⅲ-1は2013年度の研修前の年齢と各キーワード別の数値である。キーワードと各年齢毎に大きなばらつきがあった。特に３才は「保育者の保育姿勢」及び「保育者の関係」の数値が低い事が顕在化している。
３歳児のクラス担任は、正規職員とパート職員の組み合わせである。保育場面において保育者の立ち位置や３歳児が安心する距離感について意見がでた。園内研修での参加者のコメントは子どもを見守る担任の姿に対し、子どもへの言葉がけなど好感が持てる内容が多かった。しかし、「保育者の保育姿勢」及び「保育者間の関係」の数値は低い。園内研修では、これらの改善のために２人担任制の利点をいかすべく、さらなる担任間の関係強化を図った。毎回調査するアンケートに新たな項目を入れ意識づけを行なった。

図Ⅲ-2は、2013年、３回の研修を終えた後の数値である。開始前に課題であった保育者間のコミュニケーションが改善され、全体として３歳児は安定した状態となった。しかし、すべての項目で数値的には３歳・４歳の数値が全体的に低い状態である。研修では、各年齢ごとに研究保育について、参加者の意見発表を行った。子どもの姿や保育者の援助について適格な意見が出た。しかし、保育の場面のどこが、どのようにと具体的な検証や共有が浅かったと感じた。研究保育担当者が一日の保育の反省を述べ、参加者が感じたことを述べる研修内容であった。2013年度は研修後のまとめの時間がとれなかったことや、一歩踏み込んだ議論にまではいたらなかったと筆者は反省をした。また、保育者自らの保育を点数化する際、遠慮もあった可能性がある。図Ⅲ-1・図Ⅲ-2の数値に大きな変化が見られなかった理由もその要因がどこにあるのか考えるきっかけとなった。

2013年度の園内研修結果を踏まえ、2014年度は、さらに保育者間のイメージを統一することに注力し具体的課題・対策をすり合わせる手法を盛り込み実施することとした。その結果図Ⅲ-3のような結果が得られた。３回の研修を通じ、アンケートの数値に変化がみられた。2013年度４歳児たった園児が５歳児になっており子どもの姿の項目の数値が下がったことにに課題が残る。しかし、保育者の関係・保育者保育姿勢については数値が伸びている。短期間でグラフの形に変化が出る結果は、イメージを統一し保育者の意識が変化したことで園内研修の効果が表れているといえよう。

Ⅳ．研究課題(2)の結果

研究保育終了後、動画を見ながら保育について議論したことに加え、子どもの課題・保育者の課題についてアンケートをとった。その結果をもとに解答からキーワードごとに記述したものを層別し、次に保育者の課題から環境構成や援助の方法について考察する。

アンケート調査から保育者の課題についてその対応策を項目ごとに考えて記述する。

表Ⅳ-1　研修後　2014年各年齢担当保育者の課題

保育者の課題

年齢	人的／指導環境	物的環境	遊びを結ぶ方法の工夫	遊び方／助言方法の工夫	具体的な関わり言葉の工夫
5才	・T二人の距離が近いのではないか。 ・保育者の役割としてよかったのか	・ジュース作りのテーブル配置はどうか ・遊びを発展させるための環境の工夫はあったのか？	・他の子と関わりがなかった。(ジュースコーナー) ・近くで遊んでいる子の遊び・進み具合を知らせる工夫があってもよいのではないか。	・個々での遊びになっている。 ・友達の遊びに目がいく言葉・援助が保育者に必要ではないか。	・保育者中心ではなく子どもが関係を作って遊びをつくることができるか？ ・子どもの大事な一言に反応が弱い。
4才	・連携した指導ができているか ・トラブルの対応はどうしたらよいか	・遊具の数をねらいをもってセットしてはどうか? ・なぜ片づけられないのか。	・トラブルの仲裁を子ども同士ができるよう保育者も子どもの思いを尊重する。 ・個々の遊びの充実が必要である。	・次の行動を促す工夫【言葉がけのタイミング】をする。 ・我慢をする経験をする。	・「取られて嫌だ」「使っているからダメ」とはっきり言う。 ・関わるための言葉（今は遊んでいる。あとでなど）を保育者も示す。
3才	・2人担任の立ち位置は良かったのでは？ ・言葉・目配り・その子に合った支援はできていたか	・遊びが分散し、保育者との関わりも分散していないか。 ・保育室の使い方・コーナーの種類・場所は良いか	・遊びと遊びを繋げるコーナーの配置が必要。 ・Tが一緒に遊び他の子にも遊びの様子を伝えてはどうか?	・友達にくっついている子に遊びの面白さをどう伝えるか? ・保育者との遊びは3歳児に必要ではないか。	・全体に伝えたい事・個々に伝えることを意識した言葉がけの必要性 ・自分の言葉で気持ちを伝えた子へ認める対応はできていたか

表Ⅳ-2　研修後　2014年 各年齢担当保育者課題への対応策

保育者の対応策

年齢	人的／指導環境	物的環境	遊びを結ぶ方法の工夫	遊び方／助言方法の工夫	具体的な関わり言葉の工夫
5才	・一人は全体が見える場所に立つ。（体の向き）一人は意図的に立つ。 ・Tの打ち合わせ・確認が必要である。	・テーブルの置き方を変え、友達に関心を持つようにする。 ・何を経験させたいか目的をもった材料・遊具の準備をする。	・子どもが発した言葉を大切に繋いでいく。 ・色水は､同じ場にいるが遊びを他者と深めるためには道具･図鑑･虫眼鏡等難しいものも準備し楽しむ。	・次の遊びのステップを保育者は考えて助言をする。 ・繰り返しで子ども自身で提案し発展する遊びを保育者が導く。	・役割のある遊びに発展するよう気づく言葉をTは投げかける。 ・友達の思いに気づくヒントになる言葉を発していく。
4才	・意見の強い子に気持ちを伝える支援をする ・立ち位置・支援のポイントを相談する。	・遊びの内容・発展を考えた配置をする。 ・遊びのイメージを広げる場・用具を揃える。	・保育者のさり気ない呟きで互いの気持ちに気付く ・自己主張を1人で言えるような機会を作る。	・自分の思いを出すよう声を出す場を作る。 ・子どもの発した言葉に賛同し、認めることでヤル気を高める。	・相手の存在を意識した言葉がけを実践する。 ・保育者も子どもの中に入り認める言葉・相手の気持ちを伝える。
3才	・ねらいを明確にして二人の立ち位置・動き･関わりを分担する。 ・Tも遊びに入り仲間になって遊ぶ。	・何を育てたいかのねらいを明確にした環境設定をする。 ・自分の遊びを選び・集中する場を用意する。	・コーナーとコーナーの距離・種類を工夫する。 ・物への欲から関わる楽しさへ転換していく。	・遊びに必要な言葉をTがモデルで示す。 ・気分が発散できる活動を取り入れる。	・子どもと共に活動し、表現する言葉気持ちを切り替える言葉をTが示す。 ・声が出したくなる保育活動を取り入れる。

表Ⅳ-1は、研修後 2014年度のクラス担当保育者の課題をアンケートの結果から抽出したものである。表Ⅳ-2に具体的な対応策を示す。生き生きと遊ぶ子どもを目指すために、保育者は課題に対しどのような具体的な方法で対応できるかを多方面から考えている。

５歳児の担当保育者の課題は、生き生きと遊ぶ子どもを支える【保育者の立ち位置】であった。人的環境として保育者も環境の一部といわれている。五歳児の自由遊び、砂場とジュース作りの場面。黙々と子どもが個々にジュース作る、他の子と交わりや遊びが発展しなかった。その要因として、ジュース作りの【机の置き場所】と【保育者のはたらきかけが必要である】が議論された。その対応策として、２人担任制の特色を生かした、担任の立ち位置を、１人は全体が見える場所に立つ、もう一人は、意図的に立つという意識をした子どもの見守り姿勢が有効であると考えられた。そのために保育者間の打ち合わせと確認が必要ではないかという点が示された。

また、生き生きと子どもが遊ぶための物的環境構成として、友達に関心がもてるような机の配置と何を経験させたいかを考えた、材料・遊具の準備が提案されている。

４歳児担当保育者の課題は、「言葉」であった。子どもが自分の気持ちや意思を出すよう、「取られて嫌だ」「使っているからダメ」とはっきり言うこと。関わるための言葉「今は遊んでいる。あとで。」を保育者がモデルとして示すということが提案された。相手の存在を意識した言葉を発する姿を保育者が表現することで、自分をのびのび表現することができる子どもを目指すということであろう。

３歳児担当保育者の課題は、遊びと遊びが分散し、保育者との関わりも分散している点であった。特に保育室の使い方、コーナーの種類と場所の改善について議論された。その対応策として、子どもが生き生きと遊ぶためには、何を育てたいかという「ねらい」を明確にした「遊びの種類」を選択し設定すること、遊びと遊びを繋げるために、コーナー遊びの配置を改善するという意見が出されていた。

Ⅴ．研究課題（3）の結果

研究課題３の結果と分析

研究課題３では３歳児担当保育者が保育室の使い方、コーナーの種類と場所の改善について改善を試みた事例を紹介する。その対応策として､子どもが生き生きと遊ぶためには、何を育てたいかという「ねらい」を明確にした「遊びの種類」を選択し設定することや、遊びと遊びを繋げるために、コーナー遊びの配置を改善するという意見が出されていた。

１．保育環境の対比

３歳児の研修において、保育者の課題は、保育環境の見直しが提案された。そこでＡ園の３歳児担当の保育者が話し合い、保育室の物の置き方・遊具の種類の見直しを自ら試み

る。今まで長年保育室の使い方は、変えられないととらえていたが、今までの枠を取り払い、現在の子どもの姿に合わせた遊具・配置を考えた。図Ⅴ-1は、入園間もない３歳児の保育室だが図Ⅴ-2は研修後の10月に改善した保育室である。

(1) 入園間もない３歳児の保育

図Ⅴ-1　研修前　うめぐみ・春の保育室

図Ⅴ-1の写真は、入園間もない春の頃の３歳児うめぐみの室内環境構成である。入園間もない子ども達に安心して園生活が送ることができるように考えた、遊具の数をそろえ、子ども一人ひとりが自分の遊びを見つけることができるよう遊びのコーナーも様々である。

２．改善された保育室

図Ⅴ-2の写真のように、図Ⅴ-1春の頃と比較すると、子どもの導線を大きく見直し、保育者が子どもの小集団を把握しやすい位置を確保し、子どもが集中して遊ぶことができる『場』を与えることが可能となった。

図Ⅴ-2　研修後　うめぐみ・秋の保育室

以下３歳児担当保育者の感想である。

◎３歳児の環境を変えて（子供が育つための環境を構成していくことは…）

・目の前の子どもの動きが見え楽しそう!! と思える時はすんなりと遊びに入り込み同じものを持ち同じ動きをすることで一緒に遊んで楽しかったという表情になる。

・自分のしたい遊びをしていても体の向きは、友達の方向を向いて手を動かし目は友達の動きを追っている、入るタイミングをみている。

・遊具の数が少ないと貸し借りに必要な言葉が出てくる、自由な発想で遊びだすことにつながる。

・グループ（２～３人）で移動し２グループ（４～５人）ぐらいでも経験したことのある遊びは、自分たちで遊ぶことが出来る。以上の環境の変化から「子どもらしい会話、元気な声が出ている。」と園長は述べている。

Ⅵ. 反省とまとめ

現代社会の中で、変化への対応はどの職場でも求められているといえよう。目の前の子どもに最善の物的･人的環境をどのように作りだすかが保育の質を高めるポイントとなる。今回の事例は、環境により子どもの「生き生き」は変化することが改めて示された。

1．園内研修を終えて

2014年度３回の研修を終えたＡ幼稚園園長は以下の感想を示している。

・３回による園内研修の記録及びまとめの会を持ったことで、どこが大事にしてきたところであったか今後努力が必要かが見えた点にある。
・子供をどう支えていくか理論、実践の両面から、今求めていることを全職員が一緒に研修できた。共通理解のもとで保育を展開していくことために、園内研修、職員研修、自主研修は有効であった。
・今年度は、わらべ歌を通して実践をしてきた。昔の路地遊びを提供できるような居場所を提供し、友達とかかわってあそんでほしい。わらべうたはきまりがなく自由な発想のもとで展開でき、無理なく子どもの姿にあわせて楽しむことが出来る。友達とのかかわりを持って言葉を発するという視点では、とても効果的であった。

わらべ歌を計画的に保育に取り入れていくために、職員全体で研修を進めわらべ歌の年間指導計画の作成をした。子どもの姿を見ながら、今後加除修正を行いどのようにして保育に取り入れていくとよいのか、各年齢に合った内容が展開できるように心がけていきたい。

2．生き生きと遊ぶ子どもを支える保育者の役割

子どもが自分を生き生きと表現するために､担任のＡ先生は､研修会の反省からコーナーの広さに着目した。各遊具のコーナーの間隔を狭め、以下のような保育室の改善を試み子ども達の変化にであった。研修を終え環境構成に着手したＡ先生の感想を以下に示す。

○コーナーの数を少なくしたことで、予想通り、保育者が目と手と声が届く範囲で遊びが展開でき、友達との関わりや言葉のやり取りが増えてきました。そのことで、今年度にねらっている「したいこと、してほしいことを保育者や友達にことばで伝える」機会が増えたことが大きな変化です。また自分の遊びをじっくり楽しめるようになりクラス全体のガチャガチャした感じが少なくなりました。
○制作コーナーでは、角度を変えたことで今まで、目に入り気になって遊べなかった子が気にならなくなり集中して取り組めるようになりました。

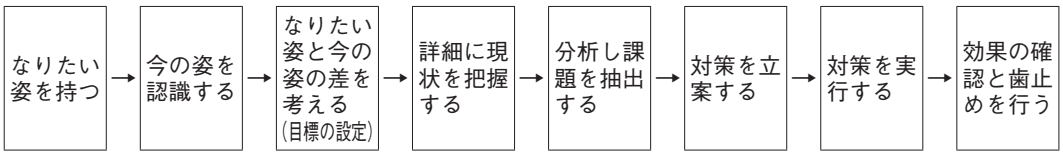
○自分なりに遊びに取り組む姿が見られ、それを見て「私も同じものがほしい」と真似て作る姿が出ています。同じものを持つことで遊びが展開していきます。

○絵本から発展して遊びだしたことは、言葉を繰り返すことの楽しさ、繰り返しのある動きなど共通のイメージで楽しめるため、心地よい響きを感じあいながら次の日にも続きを楽しんでいます。

「環境を『少し変えてみる』ことで、子どもには『かなり大きな変化』に繋がりました。環境の大切さについて勉強させていただきました。有難うございました。」と３歳児担任から語られた。

３．園内研修の在り方について

上述の園長先生の感想からも解るように、まとめの会を持つこと、すなわち方向性を定めて、イメージの共有化を図り、理論、実践の両面の研修を完結させることが園内研修において重要であると考える。そのステップを図示化し示す。



この一連のステップを実行する（やり切る）ことで保育者のモチベーションも向上し、且つ園児の反応が実感できるため、更なる取組に繋げる事ができると考える。

目的を明確にして進めるこのような園内研修は、少子化で園の在り方が多様化していくで、変化に追従する上でも有効であると考える。

おわりに

以上、２年間にわたる園内研修の結果から「生き生きと遊ぶ子ども～自分の気持ちを表現できる子ども」をテーマに園長先生を含む10名の職員のイメージの統一を図りその有効性の確認と言語化することで園内研修の在り方を明らかにした。研修後に変化したのは、物的環境構成の遊びのスペースであり、自分の気持ちを表現する言葉を発するために必要な遊具・友だち・保育者との距離であった。安心して呟ける、ありのままの自分を、３才は３才なりに出す空間があり、受け止める保育者が居るということであった。保育者の立ち位置（距離）と、物の置き方・角度は保育者の専門性として子どもが生き生きと遊ぶ姿を模索し、保育者もまた、生きた保育環境について試行錯誤していく中で、保育者の五感

をくぐり抜けて感じ、実践する保育者の質のひとつといえよう。

謝　辞

本研究の機会を与えて下さり、また、ご多忙な中、アンケート・インタビューにご協力くださいましたＡ幼稚園の保育者・職員の皆様に心から感謝いたしますと共に、その取組に敬意を表し本稿に綴ります。

引用文献

i　内閣府・子ども・子育て会議（第21回)、子ども・子育て会議基準検討部会（第25回）合同会議資料
ii　諏訪きぬ『保育者が変われば保育が変わる』フレーベル館　2003　P290
iii　諏訪きぬ『保育者が変われば保育が変わる』フレーベル館　2003　P280
iv　中坪史典『保育者の専門性を高める園内研修』発達№134. ミネルヴァ書房　2013　P46-52
v　秋田喜代美『園内研修と保育支援』臨床発達心理実践研究３．2008　P35～40
vi　秋田喜代美『H26年度関東ブロック協議会セミナー』全国保育士養成協議会　2015/1/31　P8
vii　松井剛太『保育学研究』第47巻第１号　日本保育学会　2009　P12
viii　森上史郎『 』発達№83　Vol.21　ミネルヴァ書房　2000　P72

資料１

保育チェックリスト2013年学年平均（研修前）

子どもの姿	3才	4才	5才
のびのび生活している			
自分の遊びを楽しみ気になる子どもを遊びに誘っているか			
子ども同士楽しそうに関わりあそんでいる			
活動に落ち着きがある			
夢中になって遊んでいる			
平均			
保育環境	3才	4才	5才
心地良い生活環境になっているか			
子どもが自主的・玩具もわかりやすく整っている			
危険な箇所・遊具点検をしている			
子ども自身が片付けやすい環境となっている			
平均			
保育者間の関係	3才	4才	5才
お互い気軽に声をかけながら			
仕事分担確認し保育がうまく流れる			
保育者の意思疎通ができている			
子どもの姿を取り次いでいる			
平均			
保育者の保育姿勢	3才	4才	5才
見守る保育をしている			
子どもの表情行動から気持を読み取ろうとしている			
一人一人の子どもの特徴を把握し発達に合わせた働きをしている			
自分自身が子どもと関わるのを楽しんでいる			
落ち着いて保育をしている			
平均			

保護者連携	3才	4才	5才
保護者とよく話し合い、気軽に相談にのっている			
保護者の要望・悩みを理解し、適切に対応しようと努める			
保護者から得た情報についてプライバシーに留意している			
保護者との意思疎通良く明るい			
保育者の条件	3才	4才	5才
保育計画（月案・週案）の基に保育をし、評価→反省→実践→次月・次の日の保育につなげているか			
見通しを持った保育計画を心がけ、指導計画が子どもたちの実態に沿っているか			
クラスの保育について、工夫したり子どもの姿によって臨機応変に対応できているか			
自分から提案したり積極的な考えを持って行動できているか			
自分の役割（主担当・補佐的役割・係り等）を捉えて保育しているか			
提出物の期限が守れているか			
次の日の保育準備・片づけが出来ているか			
園内研修	3才	4才	5才
研修会の内容を把握して保育しているか			
会の内容を自分の事として振り返りできているか			
保育の悩みを同僚に尋ねたり聞いて、肯定的に捉えて保育にいかしているか			
外部の研究会・研修会に進んで参加し、保育に関して新しい知識や情報を収集しようと努めたか			

資料提供：Ｓ県Ｓ保育園園内研修用保育チェックリストより